

兵庫県環境審議会総合部会・環境基本計画検討小委員会(第3回)合同会議 会議録

開会の日時 平成30年3月27日(火)
午前10時開会
午前11時55分閉会

場 所 兵庫県学校厚生会館 3階 大会議室

議 題 (1) 第4次兵庫県環境基本計画の見直しについて

出席者 会長 鈴木 胖 委員 あしだ 賀津美 委員 江崎 保男
委員 大久保 規子 委員 小川 雅由 委員 川井 浩史
委員 小林 悦夫 委員 権藤 眞禎 委員 新澤 秀則
委員 西村 多嘉子 委員 浜田 知昭 委員 福岡 誠行
委員 盛岡 通 委員 山中 詩子 委員 横山 真弓
委員 吉武 邦彦

欠席者 11名

(副会長 中瀬 勲 委員 岡本 孝子 委員 北野 美智子
委員 佐伯 真規 委員 中野 加都子 委員 西浦 道雄
委員 波田 重熙 委員 服部 保 委員 藤田 正憲
委員 迎山 志保 委員 和田 安彦)

説明のために出席した者の職氏名

環境創造局長	遠藤 英二	環境管理局長	春名 克彦
環境政策課長	梶本 修子	環境学習参事	西川 雅秀
鳥獣対策課長	塩谷 嘉宏	豊かな森づくり課長	山口 和範
森林保全室長	金子 哲朗	水大気課長	正賀 充
環境影響評価室長	上西 琴子	温暖化対策課長	小塩 浩司
環境整備課長	菅 範昭		

会議の概要

開会(午前10時)

○ 議事に先立ち、遠藤環境創造局長から挨拶がなされた。

1 議事

(1) 第4次兵庫県環境基本計画の見直しについて

第4次兵庫県環境基本計画の見直しについて、事務局(梶本環境政策課長)の説明を聴取した。

(新澤委員)

資料3の第4部37頁の「視点2 SDGsの考え方の活用」について、この項目には私の小委員会での発言も影響しているため、多少責任を感じているところであるが、このように書くと、どう活用しているかを後の方で示さなければいけない。それをどうするのかであるが、「誰一人取り残さない」ということに関して、例えば適応についていうと、適応というのは個人個人がやることができるわけで、所得の高い人は比較的適応しやすいが、最後に残ってしまうのは所得の低い人たちだと予想できる。気候変化に対する適応ということで、「誰一人取り残さない」ということを考えると、所得の面や高齢者や子どもといった脆弱な人たちといった社会的なグループ分けの視点が必要となってくるのではないかと。

第5部の第2章から第6章までは個別にリストアップされているが、最後の第7章55頁について、SDGsのゴールはよく出てくるが、その下にはターゲットがたくさんあって、兵庫県独自のターゲットがあってもいいと思うし、SDGsのそれぞれのターゲットに対して兵庫県がどう貢献するのかという視点があってもいいと思う。この章はSDGsに対して兵庫県がどう貢献するのかを書く章と理解しているが、ターゲットの中には数値目標が入っているものもあるので、それも参照するなど、前までの章と役割が違うのではっきりさせた方がいい。

(梶本環境政策課長)

SDGsを計画にどう落とし込むかというのは非常に大きな課題で、現状ではこのような形でまとめさせていただいた。ご指摘の社会的なグループによってどうしていくのかをまとめることについては、先程の説明でも、ごみ問題では高齢の方については目指すべき分別の姿が違うのではというご意見を紹介したことにも通じる。所得による分析は非常に難しいところではあるが、都市部・中山間地域でのグループ分けや、年齢層でもグループ分けもできるかと思う。そのあたりを精査し、書ける部分については盛り込んでいきたい。

ターゲットについては、事務局の方で再度接点について整理し、次回以降の議論としたい。

(盛岡委員)

資料3の最後のところにある、関連するSDGsの17のゴールと県の施策との対応表を作るということ、これは民間企業でもやっていることと同類の試みなので、それ自体を悪いと言っているのではないが、SDGsの基本的な考え方をどう受けるか、その受け方について、私は若干問題があるのではないかと思う。

どういうことかという、出だしにある経済・社会・環境の統合というのは、現在改定を行っている国の環境基本計画の前のバージョンの頃から何度も「統合」という言葉が出てくるが、この場合の「統合」というのは、英語では何にあたるのか、SDGsでいうところの「統合」というのは英語で何にあたるのか、そこが少し理解されていないのではないかと心配である。

それは「サーキュラー・エコノミー」でも同じで、ヨーロッパや国連の文章にも盛んに「サーキュラー・エコノミー」が出てきているが、それを県の施策としてどう受け止めて展開するか、といったときに、「つくる責任 つかう責任」というところについて、どう理解して県の施策として打ち出すかがあまりにも弱いという感じを受ける。

それに比べるとフードロスのところだけは、センセーショナルに、パリ協定と相前後してあ

の地で展開されたこともあり、日本でフードロスも広がってきた。また、フードロスとフードウェイスト(食品廃棄)の違いも、混在して誤解されているところがある。私としてはもう一度吟味してほしいと思う。

その前提でよく考えてみると、私は統合という言葉の代わりに「繋ぐ」「施策の連携を図る」「社会的な価値を共に生み出す・共創する」や、あるいはヨーロッパでは散々使われているのに日本では全然出てこない「社会イノベーション」という言葉、これは意図して使われていないと私は理解しているが、目標を達成するためには関係者が目標も分かち合うし、昔のパートナーシップではなく、相手が何を行っているかも理解して共に分かち合う形に持って行かないといけない。最近パートナーシップという言葉は、日本でもヨーロッパでもあまり使われない。だんだん変わってきているという根底に、この計画の中でどう位置づけるかというところを、小委員会を含めて検討いただきたい。結論を出すつもりは全くないが、今のスタイルだと、社会イノベーションを含めて少し心配である。

地域循環共生圏の話も中瀬副会長から出てきており、これも賛成だが、言葉で受け止めるだけではなく、地域循環共生圏のイメージと、SDGsの地域からつくる共生社会のイメージがどこで重なるかといったときに、例えば、具体的な例で問題があるかもしれないが、日本海に面し、合併を重ねて大きくなった都市が、元々やっていたコウノトリを育む郷という典型的な事業がある。それが歴史遺産を含めたまちづくりに展開したり、温泉場を活用した文化の振興を始めたりしている。私の分野でいうと、廃棄物の削減を含めたライフスタイルの見直しの展開を図り、最終的に生き続けられるまちにしていきたいという、SDGsの先進都市のようなこともやっておられて、内閣府にも色々な提案をされている。こういう動きが地域循環共生圏の1つの姿かもしれない。だが、特定の姿を示すのは県の計画ではないので、このイメージを受け止めたときに、彼らのコウノトリを育む郷づくりの農業施策であったり、循環施策であったりすると、実はそのSDGsの持続可能な発展目標を掲げて各主体が施策をつないで創り出していく、しかも目標はすぐ簡単には達成できないので見直しを図る、こういうプロセスである。そのあたりの理解を、専門家が集まっている小委員会で議論いただきたい。

「サーキュラー・エコノミー」については、私が部会長をしていることもあって、本来なら廃棄物処理基本計画でも掲げるべきだと反省はしているが、循環型社会を構想する場合の2030年を見通したときの目標づくりがあまり出来ていない。ヨーロッパで2030年目標が出たのがこの2月なので、本当に新しい目標だが、例えば、分別して回収されたもの、収集したものについては、埋立処分しないという大変ショッキングな目標が書かれている。これはなかなか簡単にはできないが、セパレートして回収したものは、セパレートして資源化する、という考え方である。

また、再生可能エネルギーの柱である太陽光パネルを、私たちは使う責任、作る側は作る責任からすると、ある時期にあの量を資源化していく政策をどこかで実現していかなければならない。これは国待ちではまずいと思う。技術開発もあるし、モデル的な試みもする、あるいは、回収・処理の方式についてどのようなやり方があるかを検討する。この検討についての論述が、基本計画の中にはなかなか書きづらいのだが、廃棄物処理計画にはもっと書きにくい。なので、出来ることなら、こういう基本構想の段階で課題として掲げて、ステップバイステップで攻めていきましょう、ということが一言でも書いてあることによって、私はSDGsでいうところの目標が、皆さんに共有化できていると思う。

もう1つだけ。SDGsはMDGsから来た項目がほとんどなので、なかなか日本社会で適用するのは難しいのだが、例えば交通事故で亡くなる人を半分にしたいとする。これは世界的な取組なので、日本でもそういうことをやっていきたい、と。それから私たちの社会における健康とは、むしろ高齢者であるとか壮年の方々の生活習慣病であったり、そういうところに対する対応をとりあげていかなければならない。そうすると、県が率先して歩いて回れるような県土にしていきませんか、というのを掲げてもいいのかもしれない。これは、環境面から見ても、温暖化対策になるという即物的な言い方をしなくても、そうあることによって地域の目線が低くなり、大きく人との関わりを作り合える、こういうこともSDGsで言っているところの施策の結びつきだと思う。そういうことを、是非、小委員会でご検討いただきたい。

(川井委員)

内容というよりは見せ方の話だが、資料3のSDGsの第7章というのは、実質的にはそれまでに出てきたところを再整理しただけで、これはこれで分かりやすいが、逆に何も書き込んでいないところが目についてしまう。また、本当に関係ないのかというと、例えば「持続可能な経済成長」にもおそらく関係する部分はあるだろうし、その他にも、例えば「グローバル・パートナーシップ」などもあると思う。ただ、それをやることで、どうしても抜けるところが出てきて、抜けるところを見せるくらいだったら、こういう形での整理をしない方が良いのではないかと思う。むしろ、先ほど議論が出ていたように、別の観点で、例えば同じ目標でたくさん施策が関係しているところがあるが、こういうところをどうやってお互いを関連付けるのか、串刺しのような形で連携を考えるという目標の設定にするとか、もう一回出すのであれば、もう少し別の形で整理をすれば良いのではないか。

(大久保委員)

SDGs関係だけ先に申し上げると、今の話とも関係するが、資料3の最後の整理の60頁でゴール16と17が空いた形になっている。こういう形で整理するかどうかは別として、ゴール16というのはタイトルだけ見ると分かりにくいですが、ターゲットを見ると分かりやすい。情報公開と参加の話であって、参画と協働の施策はみんなここに該当する。グローバル・パートナーシップについても同様だが、参画と協働関係が入っている。最後のところに記載するかどうかは別として、どこがどう関連しているのかをきちんと整理するうえでは重要な作業だと思う。

2点目も、それと関係するが、課題があってそれを学ぶだけでなく、どう解決していくかという取組につなげていくことが重要である。今年の3月まで環境教育等促進法の見直しをしていたが、その中でも最初の認識は、モラルで出来るだけごみを分別しましょう、といった話はかなり浸透しているのだけれども、積極的に課題の解決に取り組みめというのが非常に弱いという観点で検討を行ってきた。そういう意味では36頁も含めて、もう少し基本的な考え方ところで、SDGsあるいはESDという考え方がどういうことを求めているのかということについて記述を充実させる、例えば、新学習指導要領でも問題解決型が謳われているし、新しいキーワードとしては「フューチャー・デザイン」という形で、若者の将来利益をどう組み込む、あるいは若者が環境学習だけでなくそこから取り組むところを評価していく、という考え方も出てきている。そういうところの記述を充実させると新しいSDGsが出てくるかなと思う。

(小林委員)

SDGsの整理の仕方、私も個人的にすごく違和感がある。資料3の第7章としてこういう見せ方は良くないと思う。基本的にはSDGsの押さえているエリアと基本計画の押さえているエリアは全然違う。また、世界でいわれている環境と日本の考える環境はターゲットもエリアも全然違うので、それを単純に比較するのは良くない。実際に、国で決めている環境基本計画にも「SDGsに配慮しながら」としか書いていない。具体的にどうするかについては全く触れられておらず、それを配慮しながら計画を立てました、としか書いていない。それで良い気がする。あまりこういう見えるような書き方をすると、配慮したところではなく、抜けているところばかり指摘される恐れがある。これはやらない方が良いという気がする。

(鈴木会長)

この章のいま議論になっているところは、新しく事務局が取り入れた要素で、本日、いろいろ見ていただいて、これをどういうふうに基本計画の中にマッチさせるかについて、今日いただいた意見を基に考え、改めて検討してもらいたい。今日はそういうことにしたい。

それでは、SDGsから離れて、いろいろとご意見をいただきたい。

(横山委員)

3点ある。人材育成の強化について、資料3の第2章36頁「(4) 持続可能な社会づくりを先導する人材育成の強化」の最後に「シニア世代の掘り起こし」と書いていただいているが、これを書いたことにより、これから技術革新著しい、例えばICTを使うとか、そういったことがたくさんある中で、いかに20代、30代、40代を巻き込んでいくかが大きな課題になると考えられる。その世代を引きつけるためには、やはり職業として環境政策に関わる人材が必要不可欠で、そういった世代が関われる社会の実現ということを、しっかりどこかに書いていただきたい。例えば、基本理念に次の世代へ引き継ぐ、というような記述していただいているが、「次の世代を巻き込む」くらいでないと間に合わない。人口減少の社会の中で、シカ・イノシシの問題をどうしていくのかと考えたときに、若い世代が職業として関わらないと問題解決しないと個人的には考えている。そういうところを、たくさん人材育成について書いていただいているが、若い世代に関わる問題に、この環境基本計画は関わっていますよ、ということを積極的にアピールしていただきたい。こういった形で課題を挙げるのであれば、ぜひそういったところを挙げていただきたい。

2点目は、39頁の重点的取組で、危険な外来生物対策と書いていただいております、ヒアリなどが大きいことだと思うが、この問題で、ヒアリが日本の生態系にすぐには浸透しないということに関しては、在来のアリがバイオティックレジスタンスとして、ヒアリが多少入ってきても在来アリが攻撃をして守ってくれている、という面がある。在来の生物が、外来生物の脅威から守っている非常に良い例である。港でしっかり防除することによって、多少内陸に入ったとしても、生物多様性の保全をしっかりと、在来生物がいることにより、バイオティックレジスタンスがあるということ、是非アピールする非常にいいチャンスだと思う。危険だということと、生物多様性の保全がなかなか理解しにくいので、それを結びつける良いチャンスだと思うので、そういったところをわかりやすい形で記述していただけると、生物多様性の保全がなぜ必要なのか、理解が進むと思う。

また、その下に野生鳥獣被害対策で「GISシステム」や「ICTを用いた大型捕獲オリによる捕獲拡大」と書いていただいている。これは、いろいろな対策をアシストする機械や技術であるが、これに馴染まない方はICTが捕まえてくれると思ってしまう。こんなに高いものなので、きっと効果があると思ってしまいが、これは単に人が捕獲活動するのをアシストする機械なので、ICTをしっかりと使えないと全く機能しない、ただの機械になってしまう。こういったところも、新たな技術を活用した対策にあたる人材を育成する、人材がいないと進まない話なので、何か新しい言葉を書きたいのは分かるが、根底にこれは人がやるんだということが分かるように書き込んでいただきたい。

(西村委員)

専門家の方々が小委員会で練られた内容に関して、私が尋ねたいのは3点ある。

まず、例えば「メリハリ」という言葉が大きく文字として目に入ったが、これは一体何語なのか分からなかったのが1つ。あとカタカナの専門用語あるいは大文字で省略されている言葉があり、専門家の方々には通常の業界用語かもしれないが、どのレベルの方が読むのか、それが県民である部分については、配慮をお願いしたい。

また、従来、私どもが自分の領域でコンパクトシティと使っていたものが、スマートシティとなっているなど、時代の中で、あるいは少し内容も変わっている部分で言葉を書いていることもあり、大変勉強にはなった。これを読むのにあたり、ずいぶん辞書等を駆使したが、私も県民なので、読むにあたっては丁寧な記述をお願いしたい。

2点目は地域の「特性」という使い方と「特徴」という使い方を、どの程度意識して使っているのか、という点である。例えば、特性というのはプラスマイナスを含めたニュートラルな捉え方だと私は感じたが、特徴という場合には、ここの文意ではどうやらプラス面の意味かな、といったように感じて、これをわざわざ区別する必要があるのか。

3点目として、基本理念にある「地域力」という言葉、これは問題がたくさんあると思う。先ほど2つ目に申した地域の特性あるいは特徴という面は、環境の問題については、基盤になるとお書きになっている。これはそのとおり大賛成で、「美しい」という言葉が消えて、ほっとしていたが、客観的に言葉を使うためには地域力の中で、例えば「ふるさと意識」の「ふるさと」というのはどういった概念で使うのか。人によって「ふるさと」の受け止め方が違うと思う。いま自分が生きている、生活している、暮らしている街あるいは地域ということで、「地域力」とおっしゃっているのだと思うので、例えば、「ふるさと」という言葉が「ふるさと意識」となれば、郷土なのか、出身地なのか、県民一人ひとりによって受け止め方が違うかもしれない。私には「ふるさと」や「ふるさと意識」という言葉は理解しにくく、違和感を感じている。

付け足しで、資料2の2頁の「(2) 再生可能エネルギーの導入拡大」の3つ目に「再生可能エネルギーを活用した地産地消型水素利活用の可能性検討」とあるが、読み方が良く分からない。水素というのはずいぶん脚光を浴びているので、水素を利活用していく可能性を検討する、ということだと思うが、もう少し分かりやすい言葉を間に入れた方が良いのではないか。それとも、この「地産地消型水素利活用」は、そういう用語になっているのか。そのあたりで最初に申したとおり、当たり前になっている用語について、理解できるような説明をカタカナ用語同様お願いしたい。

(梶本環境政策課長)

正直に申し上げて、例えば、地域の特性と特徴という言葉を厳密に使い分けてはいない。一つ一つの言葉については今後きちんと精査していく。この計画の位置付けは、私も行政として取り組む計画であるとともに、地域の様々な主体の皆さんに取り組んでいただく指針でもあるので、そういう意味では皆さんにご理解いただけるのが第一である。言葉というのは非常に大事で、先程も環境と社会と経済の統合的向上が分かりづらいというご意見があったが、私も文章を書きながら県民の皆さんが自分たちの取り組むべき方向として、この言葉で分かるのか、非常に難しいと感じた。そういう意味では、取組指針としては、言葉を精査し、特に皆さんの行動に影響を与えるような言葉については、より分かりやすいものを検討していきたい。

(大久保委員)

1つ質問で、環境指標に関して、資料3の61頁では第5次計画の話で毎年度の点検評価が必要であると書いてあり、37頁は視点3として適切な進捗管理で、この中では「適切な指標の選定や重み付け、明確で客観的な評価基準の設定等」の話が書いてあるが、これまでの指標をそのまま使うという考え方なのか、それともこれから指標のあり方そのものを検討するのか伺いたい。また、検討するならどういう観点で検討するのか、進捗管理で重要になる点なので伺いたい。特に、最近はKPIがよく使われているが、本来KPIだけに頼るのはよろしくないと思う。例えば、参画と協働の分野で、1月末から2月にかけて、地球環境基金の関係でNGO活動の促進施策をどう評価するか欧州調査をしてきたのだが、EUではKPIを使っているかと聞いたら笑われてしまった。NGO活動や教育をKPIで計れるはずがない、ということで、もっと別の社会へのインパクトという観点から評価していると言われた。バランスが重要だと思うので、この点どういう視点かをお聞かせいただきたい。

もう1つは、いただいた意見の対応でグリーンインフラの話が出てきて、第4部の基本的な考え方に入っている。ここでのグリーンインフラは国の計画に合わせた用語の使い方だが、具体的にはここで特に問題になるのは環境防災の考え方が出てきている部分で、国環研や環境防災研究ということで仙台の防災会議の時に話をし、かなり国際的にもインパクトがあるものとして受け入れられた。その後、具体化をどう図るのかという部分はあまり出ていなかったが、学術体系の中でも分科会でグリーンインフラの活用も検討されているし、兵庫県としてはいい意味で特徴の出せる分野だと思うので、このあたりもう少し検討していただければと思う。

(梶本環境政策課長)

指標については、今後の検討課題ということで今回は案を提案させていただいていない。これまでの3回の全体会・小委員会の議論でも、指標についてはかなり意見が出た。現行計画では120ほどの指標を挙げている。そのいくつかを重点指標としているが、基本的にはその120の指標を動かすということで、これはこれで画期的だったが、逆にいうとその指標の中には重点化できるものと、正直なところ、あまり施策推進には意味をなさないものもある。

しかも、例えば環境の現状について評価する指標と、施策の進捗度合を評価する指標などが混ざっている。その中で、これまでも指標の整理をして軽重を付けるべきであるとか、指標を細分化することにより、トータルでこの分野は進んでいるのかが逆に分かりにくい、という意見もいただいております、トータルで評価するにはどうすれば良いかも含め、今後ご意見をいただ

いて、案を示していきたい。今後の小委員会で、指標についてはご議論いただきたい。

必ずしも数で評価できない指標もあるというのは、そのとおりで、それをどう統合し、指標を見せていくのかは検討していきたい。ただ、数値化することも、私どもの施策の進捗度合や県民の方や様々な団体の方々が取り組むときの進捗度の可視化という意味では、1つ大きな意味がある。そのあたりのバランスを取りながら、何らかの新しいものを出せていけたらと思う。今のところは議論を整理している段階で、方針をご提示できず申し訳ないが、よろしく願いたい。

(新澤委員)

資料3の34頁の基本理念について、「恵み豊かな」という表現で私が思いつくのは、生態系サービスという言葉である。環境省がストックという言葉を中心に使っていて、別にそれに配慮しているわけではないが、良質なストックから恵み、恵みというのはフローだが、恵みが出来るという考え方ができる。しかし、温暖化や廃棄物の分野になると、「恵み豊かな」をどう解釈するかが難しい。ストックという考え方でいえば、省エネ型のストックを蓄積していくのか、低炭素型のストックを蓄積していくのか、将来に繋ぐというのは大変重要で、そうすると将来世代も助かる。ストックを蓄積していけば良いというのではなく、ある種の望ましいストックを蓄積していくことが必要である。具体的な提案はできないが、「恵み豊かな」というと、狭くならないかということで、環境省が使っているからではないが、「恵み豊かな」ストックなどといった表現が、温暖化や循環の話を含むような理念の提示の仕方として良いのではないか。

(梶本環境政策課長)

私たちとしては良質なストックを支えるものとして、温暖化対策等の取組があると思っている。その基盤としての想いが、現状の記述ではやや埋もれた形になっているのではないかと思う。そのあたりについてもご意見をいただけたらと思う。

(遠藤環境創造局長)

今回はたたき台ということで、正直、ストックやフローというところまで掘り下げて提案している訳ではないので、そこはもう一度考えたい。「恵み」という言葉については、一般的に分かりやすい意味では、五感で感じて素晴らしいと思えるもの、それを「恵み」という言葉で表現している。資源循環では、資源自体が県土から生まれてくるものがたくさんある。例えば、木質バイオマスは山をしっかりと管理することで、燃料や木材が出てくる。それを製品にして、長く使って、廃棄物になっても次の使い方を考えていくことで、逆にモノを大事にすることに繋がると思っている。

また、瀬戸内海の再生という面では、漁獲資源だけでなく、景観、多島美や漁船が行き交う生活そのものも「恵み」という捉え方ができるのではないかと思う。先ほども議論にあったシカやイノシシでも、元々は山の森林資源である餌を活用して増えた動物だが、単純に人間の立場での被害対策で個体数を減らせば良いというだけではなくて、そこで獲ったものを食肉やペットフードにも活用していこうという取組も進めている。そういう意味では、「恵み」という部分では、幅広く捉えてやっていきたいと思っているし、「豊かな」という部分では県土の多様性・地域性、地域で生まれてくる資源だけではなく、みんなで環境へ取り組んでいくという姿勢自

体も「豊かなふるさとひょうご」にも繋がるのかなと思っている。今の段階では、正確に一つ一つの定義まではできていないが、そのような観点で今回は提案させていただいた。

(江崎委員)

先程、新澤委員がおっしゃったストックとフローという概念は、一般性を持ちうる。要はこの間、負のストックを随分溜めているわけだが、それも良いやり方をすれば、正のストックになる。また、重要なのはフローで、いつもフローで世の中が回っていないといけない。

資料全体の印象だが、羅列に見えてしまう。SDGs自体も羅列なので、兵庫県としては、羅列ではない形で、フォローしていく必要がある。国もいろいろ言っていて、グリーンインフラを意味する概念も昔からあるが、単にそういう言葉を使っているだけで、防災機能があることを強調しているに過ぎない。新しい言葉は、必ずあることを目指して、ある概念を盛り込んでいる。いろいろな言葉が氾濫しているが、パラ構造になってしまっているのだから、これをメタ構造にしないと理解困難となる。

(鈴木会長)

これまでにいただいた意見について、事務局から、総括というか感想を述べていただいて、それにまた意見があれば言っていて、まとめていきたいと思う。

今回、新たに記載したところについては、結構いろいろなご意見が出てきていて、それらをどう扱っていくかということかと思う。「ふるさと」という言葉を入れたら、それが何を意味しているのか、といった意見もあったが、兵庫県と関連付け、羅列だけではなくて全体の繋がりも示して、それでゴールではなくて、その実現の手立てといったところのご意見もいただいた。これをやっていると段々収集がつかなくなってくるが、そのあたりはどうか。

(遠藤環境創造局長)

言葉の使い方については、西村委員がおっしゃったように、どなたが読んでも分かりやすく、専門用語についても、例えば、分かりにくいものは括弧書きで砕けた形で解説する方法、また非常に長くなってしまふものは、現行計画でも作っているが、最後に用語集を付け、それを参照いただけるような形にしたい。

基本理念の部分については、元々幅広く、現行計画でも「豊か」と言っているが、何を「豊か」というのかは人によっても違うと思う。「美しい」という言葉も、これは貝原知事時代から「美しいひょうご」というのが一つの標語として使われており、一万人いて一人がごみを捨てるで一万个のごみが出る、一人がごみを拾うと一万个のごみが無くなる、その取組自体が「美しい」といったことだと思う。そういう面では、今回の「恵み」や「豊か」「ふるさと」も、人によってかなり受け止め方が違う言葉ではあると思うが、それらをこの基本計画ではどんな想いで使っているのかということ、その上部の説明部分に丸印でいくつか書かせていただいている。そこでもう少し想いの部分を表現できないか検討して、先生方のご意見を再度お聞かせいただければと思う。

「ふるさと」については、我々の意識にあるのは、やはり人口減少社会、これは社会的な流れで、なかなかこの流れを食い止めることが出来ない中であっても、自然増を頑張っ、人口減少を少しでも緩やかにしていこうという話や、あるいは高齢者や若い方の活躍の場として、元

気な県土づくりをしていこうという話、また社会増では、都市部を中心に交流人口対策をしっ
かりやって、少子高齢化で人口が減っても、元気な社会を作っていこう、ということ。そのた
めの一つの想いとして「ふるさと意識」を考えているが、これは、自分たちが住んでいるエリア
に対する愛着、特に生まれたところだけではなく、いま住んでいるところ、働いているところ
に対する愛着を「ふるさと」として、我々としては理解している。郷土、兵庫県に対する愛着が
深まれば、東京の大学に行っても、自分の関わりのある兵庫に戻ってきて活躍したいという
ところに繋がるのではないか。それが地域創生という面で、いま県政の大きな課題になっている
ので、そういう部分で「ふるさと」という言葉を今回使わせていただいた。

また、大久保委員からKPIのお話があったが、現行の120の指標を作ったときは、それま
での漠然とした環境基本計画に対して、なるべく具体的に、行政がきちんとやっているかとい
うところを数字で評価できるようにということを設定した。そこで、まず一歩前進した訳だが、
そのときは数値化できるものは全部数値化しようと、少し無理をしてやったという面もあって、
何年か点検・評価をしていると、そんなに重要じゃないとか、本質的に意味があるのか、とい
うような指標もあった。逆に、単純に進捗状況を見るだけではない、もっと大事なアウトプ
ットやアウトカムもあり、バックキャスト型の目標と積み上げ型の目標が混ざって、玉石
混淆のような状態だったので、まずは一番目指すべきところと、それに向かってこの5年間で
我々が施策でしっかりやっていくことを色分けして整理したい。ただ数が多ければ良い、とい
うところが前回があったので、もう少し整理をさせていただきたいと考えている。

(鈴木会長)

指標については、いままでは羅列だったが、やはり全体構造の一番上位層から個別のところ
まで、全体の目標から、ある程度カテゴリーを分けて指標を作った方が良い。かなり抽象的な
指標もあるだろうし、これはちょっとどうか、とかいうものもある。上位の方だと、必ずしも
数字ではないものや、一方、下位の方にいくと、ごみがどれだけ減ったとか、具体的な指標に
なって、それが混在しているから、全体としてどうなっているのか、という話にもなる。そう
いう面では環境基本計画は全部を含むので、難しい。

(あしだ委員)

資料2の5頁に「廃棄物エコ手形制度」とあるが、本来はこういったエコ手形制度が要らない
ような環境づくりをすることが必要不可欠である。

車で県庁まで来る際にも、あちこち見渡していると、特に私の住んでいる地域は神戸市北区
の六甲山の裏側なので、川があったり山があったりするが、残念ながら奥山側に廃棄物が投棄
されている。散歩しながら、こんなものを捨てる人がいるのだと残念な気持ちになるが、蛍が
生息するような地域でもあり、私も親から玄関前は綺麗にしておくようにとか、駅前の空間を
綺麗にするとか言われていたが、そういった取組が地域創生としても、人も集まってくるとい
うような観点からも必要である。ごみが大量に捨てられて、捨てられたごみを拾っていく手形
制度があるわけだが、何かもう一工夫できないか。これから高齢化社会で空き家も増えて、高
齢者の方々が買ったものがたくさん家の中に集まっている。それが処分されていくときに、一
つずつ仕分けをして捨てていくわけだが、それができない一人暮らしの方もいらっしゃるし、
あちこちに捨てられてごみが増えていくのではないかと、とも思う。

先程、太陽光パネルの話も本当にその通りだと思うが、第5次計画には人口減少や少子高齢化社会も書かれているので、こういったごみのない綺麗な、ごみを廃棄させないということも、SDGsの貧困撲滅ではないが、それこそ、こちらも撲滅すべきだと思う。そこからいろいろな教育やシステムが必要なこともあるかと思うが、日常的に目にするこれをどうしたら良いのか、捨てられたごみが海に流れてプラスチックごみなどにもなるわけで、そういうごみの問題についてどういう考えを持っているのか、お聞かせいただきたい。

(菅環境整備課長)

資料2の5頁に「(2) ごみが捨てられていない美しい環境」と記載しているが、施策の一つとして、クリーンアップひょうごキャンペーン、これは地域団体の方や県民の方に一斉清掃に取り組んでいただくキャンペーンで、5月30日(ごみゼロ)から7月末まで、県が旗を振って取り組んでいる。また、不法投棄対策では「廃棄物エコ手形」、これは廃棄物処理業者等のボランティアを活用して、捨てられたごみを撤去する取組になっている。

我々、廃棄物行政をやっている者の中では「ごみのごみを呼ぶ」と言って、ごみがあるとそこは捨てても良いのだと思われてしまって、次から次にごみが捨てられてしまう。ごみがないところには、心理的な抵抗があつて捨てづらいので、捨てられているところについては、ごみを拾っていくことが重要である。心理的な抵抗がない人たちにどう対応していくかというところは、なかなか難しい面があるが、環境教育といったところまで遡っていくなど、総合的な取組が必要だと考えている。一言で不法投棄にどう対応していくかということについても、なかなか一筋縄ではいかないところがあるが、環境整備課としていろいろな方法で対応していくとともに、環境部局全体として環境教育なども含め総合的に取り組んでいく。

(小川委員)

小委員会で議論した内容も含めて、かなりご意見をいただきましたと思う。小委員会で議論した中でも、相当いろいろな意見が出たが、さらに今日出た意見を含めて再検討していくこととなる。事務局への要望なのだが、今日の指摘事項を、一つずつ順番に整理しながら全体の議論をしていかないといけないが、少し時間が経過していくと抜けていくこともあると思うので、今日のイメージを残したままで次の議論をするために、今日いただいたご意見を項目に対して、当然、県としてお考えがある部分は反映していただければ良いと思うが、小委員会の議論の柱にもしないといけないと思うので、そのあたりを次回までに整理していただけると助かる。

西宮市でも環境基本計画の見直しを行っているところであるが、今日の議論を含め、県の計画から、今度は市町の計画にどう落とし込んでいけるかを考えている。県のレベルで議論された内容が、そのまま市町で実行できるかということ、それもまた難しいと思うので、そのあたりもイメージしながら、次の小委員会での議論が出来たら良いと思っている。これは感想です。

(山中委員)

人材育成の強化が話題に挙がったときに、横山委員と盛岡委員がおっしゃったことがとても印象に残った。私は30代ですが、20代や30代の活動している人たちや、暮らしのなかで活動している人たちと話をすると、既に、等身大の自分の暮らしをベースに、いろいろコミュニティを持って、自分から何かを起こしていこうという人が本当にたくさんいる。

私にご縁があって、この場でこういうふうに政策が決まるのだな、という話を聞いていて、その世界で出会う人と、今ここで話されていること、行われていることが同じ世界の出来事なのだが、今日のテーマにもなった、「結びつき」や「繋がり」というものが、本当に必要だと凄く実感した。この項目の最後のところに「掘り起こし」という言葉があって、これは凄く素敵な言葉だと思った。このような、いま既にあるものを改めて発掘していくという視点が、県の基本計画として、これからの未来の10年について語られていく指針にもなるので、現状を発掘していくということ、いま取り組んでおられることに対してスポットライトを当てるとということ、また、そういったことから、みんなの知恵を借りて作っていくということが、政策の次の段階として、実践されたときにイメージしやすいものになっていく。今日も言葉の話があったが、一般的な感覚では、専門的な話をどう咀嚼していけば良いのかという部分で、政策の本質的なところやプロセスが、審議会に入らせていただくことで、各委員の方から話を聞くことができるので、それを現場の実践の中で翻訳していくような作業が出来たら良いと思って聞いていた。

あと一つだけ。私は保育園で仕事をしているが、保護者の方や地域の方たちに想いを伝えるときに、これは個人の実践のレベルになってしまうが、凄く文章に悩まされるところがある。よくあるのが、先程の想いの部分、私たちの「ふるさと」というところは、「ふるさと」のイメージがたくさんあって、なかなか難しいので、文章を書くときには、まず客観的事実がどういうところにあるのか、普遍性がどこにあるのかという部分を分けて、最後に僅かなエッセンスだけで想いを伝えるということをする、今までの実践から人に伝わったという印象がある。想いから入ると、共感していただける方にしか伝わらないというジレンマがあるので、そういった文章も、今あるものを生かした上で配置を変えると、随分、私たち市民にも伝わりやすい文章になるのではないかなと思う。

(浜田委員)

いま山中委員からもお話があったが、私もいろいろ聞いていて、資料を読んでも、なかなか一般の人には大変だと思う。専門家が作って、完璧なものにしようとする、どうしてもいろいろなところから修正が加わって、羅列したような感じになる。しかし、そのことと、一般の人に分かりやすくということは別に考えないと、この中で同時にやるというのは、ちょっと無理があるのではないかという気がする。おそらく、実際に計画が出来た段階で、もっと分かりやすく流れが分かるような資料を作られると思うので、足りない部分はそういう方法で補足していくということでまとめないと、余計分かりにくくなってしまわないか。特に、専門家ではなく、一般の人が読んだときにどう思うかという観点については、こういう対応をします、ということを書いていかないといけないと感じた。

(鈴木会長)

それでは、これで予定の時間となりましたので、あとは事務局の方でまとめていただければと思う。ありがとうございました。

(春名環境管理局長)

鈴木部会長始め委員の皆様、長時間のご審議ありがとうございました。

今回、計画本体の素案をお示しさせていただいたが、SDGsを基本計画にどういうふうに

マッチングさせるのか、また、一般の県民の方が理解できる用語の使用や環境指標のあり方など、多数のご意見をいただいた。本日、見解をお返しできていない部分が大部分だったと思うが、次回までに整理した上で、計画本体について、さらに内容を深めていきたいと思う。

鈴木部会長を始め、委員の皆様には今後もお集まりいただき、何度もご議論いただくことになるが、引き続き、よろしくをお願いしたい。

閉会(午前 11 時 55 分)